平和の誓い新たに

今年も退職者旅行がおこなわれました。たんなる観光ではなく、それぞれに感慨があったようです。お二人から寄せられた旅行記からもそれが伺われます。

基地の中の沖縄

早瀬敏子

十二月二日から二泊三日の日程で、私たち一行四十九人は沖縄へと旅立ちました。

那覇空港におりた私は、西も東もわからないまま出迎えていた貸切りバスに乗り込み、北部へと向かいました。

巧みなガイドさんのリードに感心しながら、東支那海に面した北谷浜（チャタンハマ）、恩納村（オンナソン）海岸、美しいエメラルドグリーンに広がる海の色をながめ、伊武部（インブ）ビーチではグラスボートに乗って、透明で神秘的な海底を見て「わぁ、きれいだ」と歓声があがっていました。

海洋博公園では、イルカのショーを見ました。イルカたちは、音楽に乗って気持よさそうに泳ぎまわっています。調教師の合図でいろんな芸ができます。最後には水中に頭を突っ込み、尾びれでサヨナラのあいさつをして、愛きょうを振りまいて喜ばせてくれました。

あちこちの家の屋根には、獅子の置物が向かい合わせに乗せられ、珍しいと思ったのは、色つきの龍が乗った墓、ほとんどが亀甲型で大小さまざまです。何千万円もするのがあると聞いて驚きました。

さすが亜熱帯、沖縄の冬は暦の上だけだそうです。一月になればひがん桜が咲き始め、二月、三月になればレンゲ草やタンポポにもんしろ蝶が飛び交うそうです。

東南植物楽園や、ひめゆりパークの雄大で美しいながめなど、別世界のような思い出はいつまでも残るでしょう。

そして、決して忘れてはならないことがたくさんありました。広大な海に囲まれた沖縄、その広大さに平行するように金網がいたる所に張られています。アメリカの基地です。羽田空港の七倍もあるという嘉手納空軍基地では、ものすごい騒音で戦闘機が離着陸しています。弾薬庫があります。戦車も配備されています。いつ戦争が起きてもおかしくありません。私は背すじが寒くなりました。

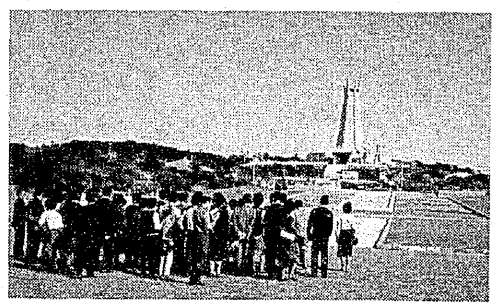
やっと本土に復帰しても、基地のある沖縄は、どう考えても平和ではありません。

ひめゆりの塔、健児の塔の前では目頭が重たくなって仕方がありませんでした。「想像を絶する苦しみの末に死に絶えた人びと」ちょうど私と同世代、いやもっと若い人たちもいたと聞きます。

戦場にこそ出ていませんが、多少は戦争を経験した私にとって、戦争は「いやだ」「起こしてはならない」と。平和資料館で戦争体験の実相をありのまま知らされ、戦争をいちだんと憎みました。どんな理由があって、人間が人間を殺し合う戦争だけは起こさないようにしなければなりません。

バスは、沖縄北部、中部、南部の一部分ずつ走ったわけですが、私にとってこの旅行は思い出のページを飾るのにふさわしいものでした。

これも思えば、長い間差別に苦しみながら、定年までたたかい抜いた主人たちのおかげだと感謝しています。本当にご苦労さまでした。



平和記念塔の前で

沖縄戦を実感

白石要

快晴に恵まれて、ジェット機の旅も気分は上乗で、沖縄へと向かう。

空港には、那覇交通のバスと国崎運転手、安次嶺明美ガイドさんが待っていた。今回の旅は、この『アシミネ』さんの案内で、沖縄のすべてを語ってもらったような気がする。

旅程の三日間、息もつかせぬ案内ぶりに、参加した皆んながただ感心するばかりだった。

まず見たのは那覇基地。七十二万坪の広さだそうだ。数多くの軍用機が滑走路に並び、飛び立ち、着陸する。これが基地沖縄の現実だといわんばかりである。

海洋博道路を走り水族館へ。帰路、パイン園に寄り、空港まで品物を送ってもらえると聞き、早速買い物がはじまる。

途中青くすき透る海の色に見とれながら、有明海の話が出る。

ホテルに着いて情緒豊かな琉球舞踊を見ながらの夕食。泡盛りの味もまた格別である。

クライマックスは南部の戦跡地。ここに来て観光気分できた自分を恥じる。

〝ひめゆりの塔〟〝海軍壕〟をまわり、資料館で数々の展示品を見て四十年前の沖縄戦の生々しい光景が目に浮かぶ。ガイドさんの切々とした訴えるような説明も加わり、涙を流した。

〝戦争を起こすのも人間、起こさないように努力するのも人間〟と、資料館の壁に書かれていたこの一文は、皆んなが胸に刻み込まなければならないと強く思う。

帰りのバスの中では、半ば強制的に沖縄の方言を暗唱させられ爆笑の渦。

「ウンヂャーイッペーチラカーギ」―あなたはとても美人だね、そして私は、サヨナラは言いません―。「また沖縄へ、メンソーレ」と、親しみをこめたあいさつを受け、楽しい旅を終えた。

裁判勝利へ ご支援を――

遺族会会長　溝口生松

新年おめでとうございます。

昨年は初頭から、三井鉱山の保安無視によって有明鉱で坑内火災が起こり、八十三人の尊い生命が奪われたことは忘れることのできないことでした。ご遺族の樺島敏治さんご夫妻は、一人息子の剛さん（二十三歳）を殺され、悲しみと怒りをこめて責任追及のための告訴告発、さらに民事訴訟に勇気をもって立ち上がられました。また、その他の遺族も第二陣の訴訟を起こされました。有明鉱災害については政府調査団も、警察の調査でも保安点検の不備でベルトコンベアーの摩擦が原因だと指摘されています。

昭和三十八年十一月九日、三川鉱の炭じん爆発も有明鉱と同様に会社の人員減の合理化によって起こし、四百五十八人の命を奪い八百三十九人のCO患者を出しました。

あれから二十一年間、受川さんはじめ多数のCO患者の方が退院できず、苦しみつづけています。家族の方も苦労の連続です。私たち遺族は、初代会長の丸山さんを先頭にして、殺人罪として告訴告発しましたが、昭和四十一年八月十三日検察庁は原因不明、証拠不十分で不起訴としました。

私たち遺族は、腹の底から憤慨し、この時ほど残念に思ったことはありませんでした。

また、三川鉱には天井から風化砂岩が降って炭じんを消すので爆発は起こらないなどという妙な学説をつくりだして、災害責任を回避していることに納得できません。

当時の呉比鉱長はじめ霜出保安部長などは、当然災害の責任を取らなければなりません。

私たち原告団四百二十人は昭和四十八年五月十一日、三池労組の支援を受けて責任追及の民事裁判を起こし、すでに十一年を経過し、五十五回の公判をたたかい続けてきました。

遺族のために誘致したアンニット工場と大牟田の縫製工場に就職した遺族は、低賃金と重労働で二十一年間働き続けています。

縫製工場の遺族には十一月九日の命日にも休ませず、組合の抗議集会にも二十一年間一回も参加させません。命日にも朝八時十五分から就労して、昼食四十五分間のほかは休息もなく、終日ミシンを踏んで夕方五時までの連続作業です。夕方六時頃暗くなって家に帰ります。

私たちはせめて命日一日休ませるように交渉しても、十一月は多忙な時期で許可しません。二十一年間、遺族は人の知らないさまざまな苦労を続けています。

いよいよ裁判も終りに近づいていますが、私たち原告団は一層強固に団結し、裁判闘争を勝ち抜く決意です。

全国の皆さんのご支援・ご協力を心からお願いいたします。

団結して責任追及を

原告団12回総会開く

三池大災害原告団の第十二回定期総会が十二月二日午前九時三十分から、大牟田労働福祉会館で、遺族、患者、家族の会員などが参加して開かれました。

総会では経過報告、今後の方針などを決めた

総会は、永江さん、藤田さん、塚本さんを議長団に選び、溝口遺族会会長が開会のあいさつを述べたあと、この一年間に亡くなったCO患者の吉田さん、赤井さん、武田さんと家族の会で亡くなった方々、さらに有明鉱、四山鉱の災害の犠牲者に黙とうをささげました。

原告団を代表して小川団長は「またも有明鉱で大量殺人が起こった。これは二十一年前の三池大災害の会社責任が明らかになっていないからであり、あくまで責任を追及することが生きている者のつとめです。裁判闘争も大詰めにきており、団結して大きな力に……」と訴え、あいさつしました。

このあと、三池労組を代表して中原組合長があいさつ。つづいて平川主婦会会長、式島荒尾地評会長、運尾社会党大牟田総支部長、下川共産党県委員の皆さんが来賓として激励と連帯のあいさつをおくられました。また、小島弁護士は、裁判の経過と今後のたたかいについてくわしく報告されました。

つぎに有明災害原告団の樺島ミチ子さんからメッセージがおくられ、各地からの激電が紹介され、議事に移りました。

（くわしくは次号で）